

身から出た錆？ 過激思想？ テロの原因についての英の

不安な論争

【訳者注】大きなテロが起こる度に、日本を含めた西側政府の首脳同士が、「このような暴力は断じて許すことができない」という観点を確認し合う。お悔みとしてはそれでよいが、もし、イギリスのメイ首相のように、「我々の価値観（民主主義）が（彼らジハードイストのそれより）より優れていると理解させたときに、彼らを敗退させることができる」（p.2）などという考え方を、他の首脳が共有していたとしたら、大変なことになる。永遠に解決しないどころか、事態は悪化するだろう。なぜなら暴力に対しては暴力が返ってくるという因果法則、それに大暴力を先に振るったのは自分の方だという事実を無視して、いきり立ってみてもしょうがないからである。わずかの救いは、英国国民の多数派がそれを知っているらしいこと（p.3）、また野党労働党のコービン党首が、そうは考えていないらしいことである。

この記事の内容は「12年前のジョン・ピルジャーによって、マンチェスター・テロを読む」<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/170526.pdf>と基本的に同じだが、ここに念を押したのは、ここで説明されている、（メディアの言わない）基本的“事実”の上に立たなければ、何も論じられず、前へも進めないと考えたからである。

RT

June 5, 2017



英首相テリーザ・メイ（左）と野党労働党党首ジェレミー・コービン

最近のテロ攻撃の後を受けて、テリーザ・メイは、過激思想イデオロギーの断固たる取締り

を呼びかけ、ジェレミー・コービンが、アラブ諸国に呼びかけて、彼らがこれを援護するのをやめさせようと言った。一方、ジョン・ピルジャーは、RTに対し、こうした攻撃はイギリスの対外政策の“産物”だと主張した。

日曜日のロンドン橋テロの余波として、いかにテロリズムと戦うかという討論で、メイ英首相は、まず何よりも、イスラム主義イデオロギーを根絶することが肝要だと言い、「我々は、こんなことがいつまでも続けられると思わせてはならない」と加えた。

「テロリズムは、我々がこのような暴力から人々の心を離れさせ、我々の価値観——複数主義のイギリスの価値観——が（彼らジハードイストのそれより）優れている」と理解させたときに、初めて敗退させることができる」と彼女は言った。

<https://youtu.be/mZE97pYI8dE>

（ジョン・ピルジャー、イギリスのテロについて語る：首相は何を知っていたのか？）

テロリストのプロパガンダを根絶するだけでなく、「イラクやシリアの ISIS を撲滅する」軍事行動が必要であり、また国内でも、過激思想の発揚に対して寛容さを示さないことが重要だと、彼女は言った。

メイの労働党ライバル、コービンは——ロンドンの惨事のあと暫く沈黙していたが——再び選挙運動を開始し、警察力を強化して「生命を守るのに必要なあらゆる手段を用いる、十分な権力を彼らに与える」と約束し、その人員を強化して、更に 1 万名増加すると言い、メイ首相が大きく警察力をカットする方針でいるのを攻撃した。

過激化に対するメイの心配を受けて、コービンは、イギリスは「サウジアラビアや他の湾岸諸国から始めて、困難があっても話し合いをする」必要がある、それは彼らが「過激主義イデオロギーを金銭援助し、焚き付けているからだ」と言った。

サウジを含むと言われる外国が、イスラム主義集団を金銭援助している問題を追及していることを、内務省は内密にしていると認めたことに言及して、コービンは「報告の弾圧」だとメイを糾弾した。 <https://www.theguardian.com/uk-news/2017/may/31/sensitive-uk-terror-funding-inquiry-findings-may-never-be-published-saudi-arabia>

金曜日、選挙演説の壇上から、この頑固な反戦の立場をとる労働党党首は、イラクやリビアのような、自国の国境外で軍事紛争に巻き込まれることによって、イギリスは報復を招いていると話した。

「多くの専門家が、わが政府が外国で支持し、また戦った戦争と、我が国で起こっているテロの間には、繋がりがあると指摘している」とコービンが言った。彼はつけ加えて、イギリスの干渉政策と、我々自身の国内でのテロの間に、明らかな繋がりがあると単に指摘することによって、テロを正当化できるとは、決して解釈してはならないと言った。

YouGov 世論調査によれば、イギリス国土でのテロ攻撃の高まりに対する、このコービンの説明は、民衆の琴線に触れたようである。調査対象となった 7,134 人の英国市民のうちの 53 パーセントが、戦争が少なくとも部分的に、イギリスに対するテロ攻撃の原因になっていると思う、と答えている。そこに関連を認めないと答えた人々は 24 パーセントにとどまり、別の 23 パーセントは知らないと答えた。

ピルジャー：テロ攻撃は「イギリスの対外政策、つまり他国侵略の産物だ」

作家でドキュメンタリー映画製作者 John Pilger は、RT の Afshin Rattansi に対し、最近何十年かの、介入主義的なイギリスの対外政策が、報復を受けたものと思うと述べた。ピルジャーは RT の番組 “Going Underground” に、土曜日、ロンドンの攻撃に先立って出演して話した。

関連記事：「# ロンドン橋テロ攻撃：西側の反テロ政策は効き目なしと認めるべき時」

<https://www.rt.com/op-edge/390818-london-bridge-terrorist-attack/>

イギリス国土へのテロ攻撃が「共通にもっているのは、それがイギリスの対外政策の産物であり、我々がいるべきでない所にいることの結果であることだ」とピルジャーは言った。

21 世紀のイギリスでの最も恐ろしいテロ攻撃、特に最近のマンチェスター・アリーナ攻撃と 2005 年のロンドン地下鉄爆弾は、「イギリスの対外政策の石が、一瞬持ち上げられ、因果の道理が見えた」ことを示すものだと言っている。 “リビア・イスラム戦闘集団” (LIFG) のメンバーは、ムアンマル・カダフィ体制を倒す上で重要な役割を果たしたと主張している者たちだが、テリーザ・メイが英内務大臣だったとき、彼らは全く自由にヨーロッパへ渡ることを許された。

「アフリカ最大の石油産出国リビアが侵略されたとき、“マンチェスター・ボーイズ” と呼ばれていた、マンチェスターのサラフィストやワッハビストは、リビアへ行くのは自由だと言われた。…メイはこの国の内務大臣だったから、彼女は、MI 5 の解いた身柄監視命令に

対する責任者だった。彼らの一人が話したところによると、彼がヒースロー空港に着いたとき、反テロ警察に止められ、名前と MI 5 の番号を告げた。彼らは電話をかけ、彼はそこに坐って待っていた。すると彼らは「OK、問題はない。このまま戦争に行け」と言ったという。ピルジャーはこうつけ加えた——「彼らはカダフィを倒そうとっていて、この者たちが利用されたのです。」

https://twitter.com/RT_com/status/868265496554209280/photo/1

関連記事：「Lockerbie 爆弾テロ犯人の息子いわく、イギリスのリビアへの介入がマンチェスター攻撃の原因だ」<https://www.rt.com/uk/390135-lockerbie-bomber-manchester-libya/>

ひとたび、リビアでカダフィが除かれると、その時まで「少なくともアルカーイダ・シンパになっていた」これら戦闘家たちの「次の駐留地」はシリアだった。

“マンチェスター・ボーイズ”の非常に多くが、西洋の戦争や、アサド政府を倒す努力のために戦って、シリアで死んだのです」と、ピルジャーは RT 記者に話した。

「確かにそれはひどく複雑な物語です。しかしそこを貫いている糸がある。そしてその最も強い糸は、英政府、米政府、仏政府など強力な西側政府が、彼らが資産 (assets) と呼ぶ、これらの者たちに対して行う支援です。…この共同仕事の網の目、中東の代理兵力は、常に変わらずこの種の暴力を生み出そうとします。そして 9・11 以来、我々が見てきたものは、その暴力が本国へ戻ってきたということ、アメリカだけでなく、このイギリスにも戻ってきたということです」と彼は言った。

「我々は、それに対して責任を取らねばなりません。それは討論されねばならない。我々は彼らの手で目隠しをされ、彼らの指で耳栓をされて、歩き回ることはできない。それは馬鹿げています。マンチェスターで、ロンドン地下鉄で、ツインタワーで死んだ人々、またイエメンやアフガニスタンで死んだすべての子供たちに、そんな報いをするには許されないことです。」

——以上